



生きることは 絵を描くことに値するか 上

破天荒な日本のゴッホ、長谷川利行と養育院

監修：稲松孝思顧問医

作：栄畑南美（えばた なみ） 老年学情報センター

櫻園通信 57 令和2年4月

東京都健康長寿医療センター

養育院・渋沢記念コーナー

連絡先：老年学情報センター

絵を描くことは、生きることに値するといふ人は多いが、生きることは絵を描くことに値するか

そう問うたのは、昭和初期の東京を描いた放浪画家、長谷川利行です。利行は、破天荒な生き方とその画風から「日本のゴッホ」とも呼ばれています。

最近では、2020年2月25日テレビ東京系にて放送された「開運！なんでも鑑定団」という番組で、利行の未発表の作品ではないかという絵が鑑定されていました。

この絵は残念ながら二セモノだったのですが、2009年に同番組で鑑定された本物の利行の作品は、なんと1800万円の鑑定額が付いたとのことでした。



この作品が、番組で鑑定された作品「カフェ・パウリスタ」です。現在は、東京国立近代美術館が所蔵しています。

利行の絵は自由奔放な筆致が特徴ですが、利行自身もかなり自由奔放で壮絶な生き方をした人物だったようです。

そして、利行が人生の最後を過ごしたのが、東京都健康長寿医療センターの前身である養育院でした。

では、長谷川利行という人物と**養育院**のつながりを、紐解いてみましょう。

長谷川利行、愛称「りこう」は、1891 年に京都府で生まれました。

青春時代は文学に熱中し、詩や短歌を創作しました。

独学で絵を学び 30 歳頃に上京しますが、関東大震災で被災し一時京都へ戻ります。

その後再び上京し、第 14 回二科展で樗牛賞（ちょぎゅうしょう）、第 3 回 1930 年協会展で奨励賞を受賞するなど、徐々に画家としての評価を高めていきました。



この作品は、第 14 回二科展で樗牛賞を受賞した作品「麦酒室」です。利行は決まったアトリエを持たず、街を放浪して絵を描いていました。

利行が描いたのは、バーやビアホール、カフェ、ガスタンクや地下鉄の雑踏などの東京の風景とそこに生きる人々でした。

利行は街を歩き回り、カンヴァスだけではなく、チラシの裏やタバコの空き箱にまで、嵐のように猛烈な早描きで絵を描いたといいます。そして、日々の生活費のために、友人・知人にスケッチや油絵を強引に売りつけました。

利行の生活は、毎晩酒場で安酒を飲み、浅草や山谷、新宿の簡易宿泊所を転々とするなど荒れたものであり、その素行の悪さから、画家仲間たちからは嫌われていたといいます。

（つづく）



生きることは 絵を描くことに値するか 下

破天荒な日本のゴッホ、長谷川利行と養育院

監修：稲松孝思顧問医

作：栄畑南美（えばた なみ） 老年学情報センター

櫻園通信 58 令和2年4月

東京都健康長寿医療センター

養育院・渋沢記念コーナー

連絡先：老年学情報センター

利行は、酒癖と放浪癖から、だんだんと胃を病み体が衰弱していきます。

ついに1940年春、三河島駅近くの路上で行き倒れ、養育院に収容されます。胃癌でした。

矢野文夫編『長谷川利行全文集』に、利行が養育院から親友・矢野文夫宛てに出した葉書の文が載っているので、以下引用します。利行は、養育院の第5病棟に収容されていたようです。

昭和15年5月31日 矢野文夫宛

養育院第五病室二胃ノ手術デ居リマス。午前中ニ一度ミニ来テ下サイ。

〔中略〕（至急来テクレナイト死亡スル、動ケナイノデス）市電板橋終点ヨリー丁ホドノ処デス。

板橋区板橋町東京市養育院第五病棟内 長谷川利行出

（矢野文夫編、1981年、p.305）

この葉書を受け取った矢野は、友人と一緒に養育院へ駆けつけます。

その養育院での面会の様子が、矢野の前提書に記載されています。

陰湿な消毒薬の匂いが水のように漂う暗い病棟—そこは百畳敷ほどの広さで何十というベットが二列に並んでいた。土色をした粘土のような顔が一齐にわれわれ闖入者を冷たく凝視するような気がした。

長谷川は磨り切れた白衣を着ていたが、むくっと起き上がった。

〔中略〕

「外に出よう、裏に花畑がある」

〔中略〕

花圃には白い雛菊の花が一めんに咲いていた。「その花の中にしゃがめよ、一枚撮ろう」

一枚うつすと、彼は、突然大声を発した。それは烈しい怒りに燃えた何ともいえぬ不気味な動物のような唸り声とも聞けるものであった。

「糞っ！ 死んだろか！」

ごろっと花の中に仰向けにひっくりかえった。白眼をむいて、決るように私を鋭く凝視した。（前提書、pp.305-307）

自画像



矢野の記述から、当時の養育院と利行の暗い様子が伝わってきます。矢野は、この面会時に「長谷川は死ぬ」と予感したといいます。

そして、1940年10月12日、利行は49歳で亡くなりました。

矢野（1981）は、「誰ひとり看取る者なく死んだ。遺品のスケッチブックや手記など、養育院の規則によりことごとく焼却された」（p.315）と書いています。

焼却処分は当時の規則なので仕方ないのですが、もしスケッチブックなど遺品が現在に残っていれば、いったいいくら
の値段が付いたのだろう、とってしましますね。

さて、1969年（昭和44年）、上野不忍池のほとりに利行碑が建立されました。石碑の文字は、親交のあった熊谷守一が書きました。

その隣には、利行が詠んだ歌二首が刻まれた歌碑があります。そのうちの一首を最後に紹介しましょう。

人知れず朽ちも果つべき身一つの いまがいとほし涙拭わず

養育院で亡くなった破天荒な画家、長谷川利行。彼は、「今」を純粹に愛した画家だったのかもしれません。



【参考文献】

近藤祐（2011）『洋画家たちの東京』彩流社

矢野文夫（1974）『長谷川利行』美術出版

——編（1981）『長谷川利行全文集』五月書房

吉田和正（2000）『アウトローと呼ばれた画家—評伝 長谷川利行』小学館

「長谷川利行」『Wikipedia』<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%95%B7%E8%B0%B7%E5%B7%9D%E5%88%A9%E8%A1%8C> 2020年4月20日最終閲覧



明治大学

明治大学校歌を作詞した 詩人・児玉花外と養育院

栄畑南美(えばた なみ) 老年学情報センター

櫻園通信 59 令和2年5月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先: 老年学情報センター

「白雲なびく駿河台 眉秀でたる若人が…」で始まる明治大学校歌。東京六大学野球の応援等で、聞いたことがある方もいらっしゃるのではないのでしょうか。この校歌を作詞したのは、詩人・児玉花外（こだま かがい）です。1972年に編纂された『養育院百年史』の年表には、「昭和18年9月20日、明大校歌『白雲なびく』の作者、熱血の詩人児玉花外（傳八）本院にて没（69）」（p.181）と記されています。養育院で亡くなった児玉花外とは、どのような人物だったのでしょうか。



児玉花外

児玉花外（本名：児玉伝八）は、1874年（明治7年）に京都で生まれました。花外は5歳の時に母を亡くします。新島襄が創立した同志社予備校に進学しますが、14歳の時、母代わりだった姉千代をも亡くしました。その後、慕っていた新島襄も病死し、花外は同志社を退学、京都を出ていきます。仙台の東華学校、札幌農学校、東京専門学校（後の早稲田大学）に入学しますが、いずれも中退します。

花外は、東京専門学校在学中に詩作を始め、『早稲田文学』に寄稿するようになります。そして、だんだんと新進詩人として認められていくのでした。

花外は、社会主義詩人として活動していました。1903年、著作『社会主義詩集』を刊行しようとしたのですが、発禁処分となり、一躍有名になります。その後は、詩集『ゆく雲』などを発表、文芸誌の詩欄の選者も務め、後進の指導にも当たりました。

明大校歌を作詞したのは、1920 年（大正 9 年）、花外 46 歳の時でした。当時、花形スポーツであった隅田川の学生選手権ボートレースで、応援歌が必要になりました。三人の明大生が教授の紹介状を持って花外の家を訪問したところ、花外は作詞を快諾したといいます。花外の書いた歌詞に曲をつけたのが、作曲家の山田耕作でした。晩年、養育院に収容されていた花外は、明大関係者の訪問を大変喜んだそうです。子どもがいなかった花外にとって、さながら我が子の見舞いのようなだったのかもしれません。



1943 年 晩年の児玉花外

花外は、最初の妻とは離別、再婚した二人目の妻とは死別しました。また、大の酒好きで酒を飲み出すと止まらなかったといいます。長年の多量の飲酒によって、花外は健康を損なっています。ついに、1934 年（昭和 9 年）、多発性関節炎で東京帝国大学の附属病院に入院することになりました。1936 年に帝大病院を退院しますが、引き取る家族がいなかったため、養育院へ移ります。62 歳でした。部屋は分室 3 号棟だったそうです。

花外は、養育院で思いのほか穏やかな生活を送ったようです。窓の外の桜を眺め、詩を作り、印税が少し入った時には、酒を誰かに買いに行ってもらって、こっそり夜遅くに近くの患者たちと楽しんでいたといいます。また、晩年は日蓮宗を信仰し、心の支えにもしていました。

戦時下だった 1943 年（昭和 18 年）9 月 20 日、花外は急性腸疾患のため、69 歳で亡くなりました。穏やかな最期だったといいます。その後、花外がいた分室 3 号棟は、1945 年 4 月 13 日夜半からの東京大空襲によって、養育院本院とともに消失してしまいました。

【参考文献】

石井敏達（1969）「養育院百年史の陰に一児玉花外三十年忌を偲ぶ」

東京都養育院編（1972）『養育院百年史』東京都。

「児玉花外」Wikipedia、<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%85%90%E7%8E%89%E8%8A%B1%E5%A4%96> 2020 年 5 月 21 日最終閲覧。

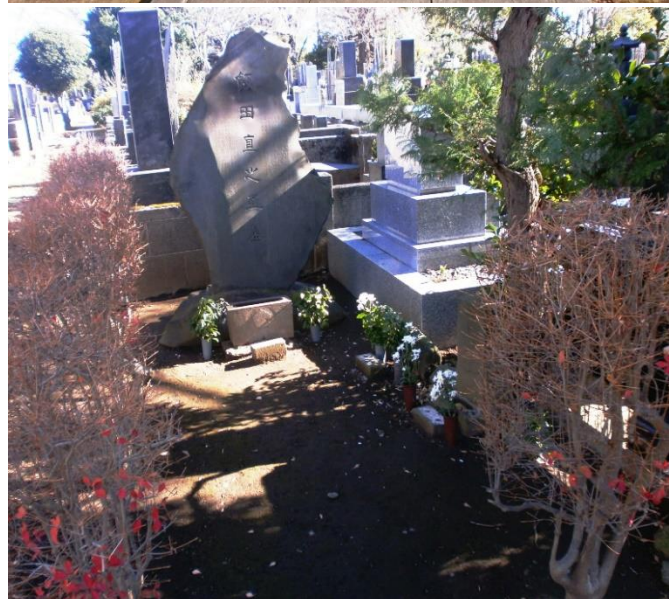
「明大校歌誕生の周辺（中村雄二郎）」明治大学ホームページ、<https://www.meiji.ac.jp/koh/o/information/schoolsong/origin.html> 2020 年 5 月 21 日最終閲覧。



養育院の初代院長 2つのお墓

宮本孝一
老年学情報センター

櫻園通信 60 令和3年1月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先: 老年学情報センター



東京都台東区谷中には約七千のお墓が立つ広大な墓地があります。

この墓地は、東京都立谷中墓地・天王寺墓地・寛永寺墓地の三つの墓地を併せたものです。著名人のお墓もたくさんあります。春には桜のトンネルができる桜の名所です。

寛永寺墓地の区域には、最後の將軍徳川慶喜のお墓があります。また隣接する了侘（りようごん）寺墓地には、明治初めからの大正時代はじめまでの養育院収容者約三千八百人

が眠る「養育院合祀塚」があります。（参考 桜園通信十六）

広大な墓地の中央の広い道は、江戸時代はお寺の参道で、そこで催される富くじが人気でした。参道には富くじを楽しむ茶屋が立ち並んでいました。

この二つの写真はどちらも谷中霊園で撮影した養育院初代院長のお墓です。

上のお墓には「青洲澁澤栄一墓」と彫られています。

日本資本主義の父であり、養育院院長を亡くなるまで約五十年続けた渋沢栄一のお墓です。

青洲（せいえん）というのは渋沢栄一の号（本名とは別に使う名前）で、渋沢が十八歳の時、いとこで渋沢の学問の先生であった尾高惇忠（おだかあつただ）に名づけられました。

青洲の由来は、渋沢の実家が「淵上小屋」と呼ばれていて、その家のそばに淵があったことにちなんだものといわれます。



もう一つの“初代養育院院長”のお墓は自然石の形を活かした、ユニークなお墓です。

「飯田直之丞（丞）墓」と刻まれています」。



文書には、明治六年一月に「会議所（江戸の救貧基金七分積金を管理するために大久保一翁府知事が設立した組織）」より飯田直之丞が養育院院長に任命された記録が残っています。

その年、渋沢栄一は五月まで大蔵省に勤務し、その後辞職して実業家の道に進みます。養育院運営には関わっていません。

渋沢栄一が間接的に養育院に関わりはじめたのは翌明治七年に会議所の共有金（七分積金）取締に任命されてからです。養育院は会議所の付属施設でした。

会議所が明治九年に廃止され、養育院が東京府の管轄になるとき、渋沢栄一は養育院の代表者（事務長）に就任。さらに、明治十二年、養育院の組織再編で事務長職が院長と改称され、渋沢栄一がそのまま院長に就きました。

“初代院長渋沢栄一”のはじまりです。

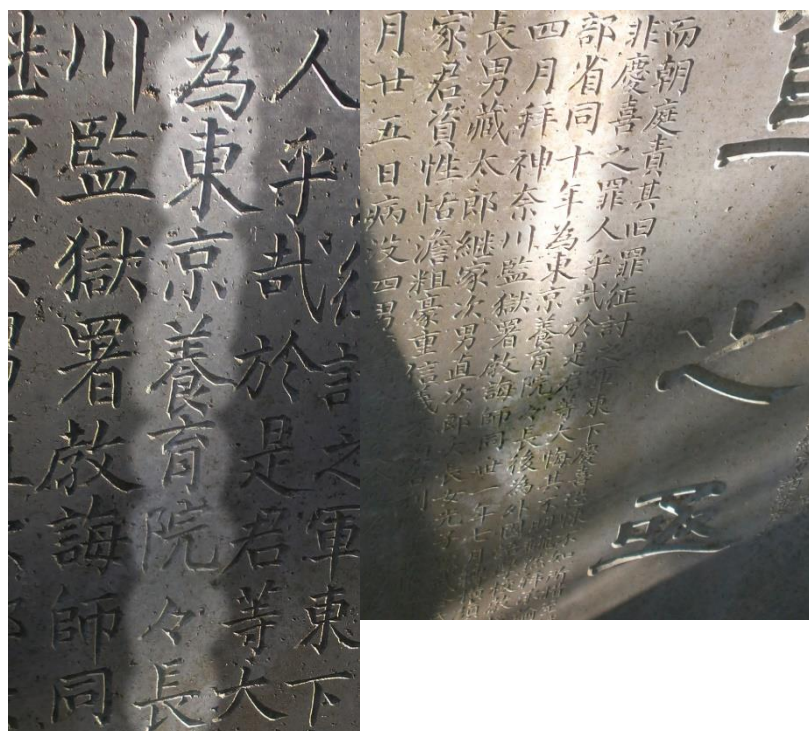
渋沢栄一が養育院事務長、院長となる間、飯田直之丞も養育院掛・養育院副幹事として養育院経営を担っていました。飯田が院長でなくなったのは渋沢が事務長になったときです。それまでの院長職が廃止され、飯田は養育院掛という役職になりました。（参考 桜園通信 二三）

飯田直之丞は養育院史であまり語られることのない“幻の初代院長”です。

さて、飯田直之丞の墓には生涯の経歴がびっしりと彫られています。ここに「明治五年出仕文部省、同十年為東京養育院々長」という文字を読み取ることができます。

明治十年に養育院院長になった？
飯田直之丞院長は明治六年から九年までです。

なぜ明治十年と刻まれたのかはわかりません。謎です。



墓地の写真は、宮本撮影（2020年1月）
川の写真はフリー画像を使用



渋沢栄一銅像の 除幕式

宮本孝一
老年学情報センター

櫻園通信 61 令和3年1月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先: 老年学情報センター

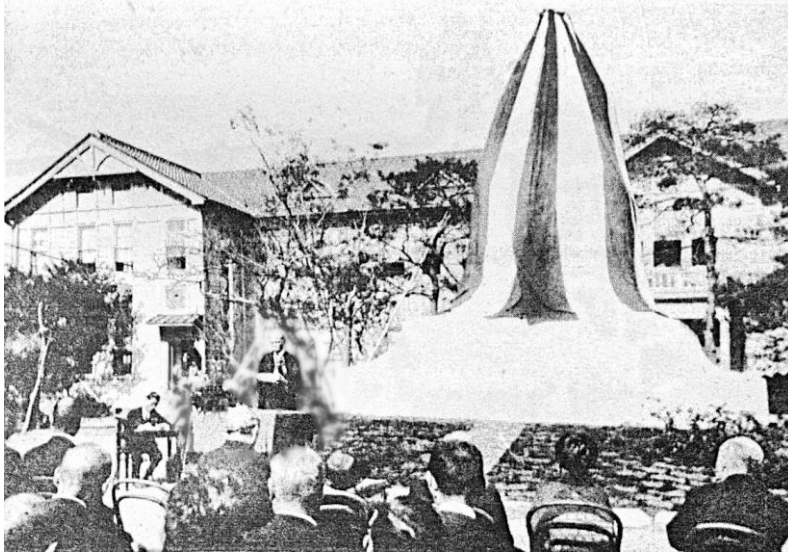
東京都健康長寿医療センターの敷地内には、約百年前に養育院本院に建立された巨大な渋沢栄一銅像が残っています。
養育院が大塚から板橋に移転してすぐに建てられものです。



その除幕式当日の様子はどのようなものだったでしょうか。
その記録を見てみましょう。読みやすいように改行やよみがななどを加えました。

◆
当日は晩秋稀なる小春日和にて、定刻前より或は自動車に或は徒歩に続々参着せらるる来賓織るが如く、真に板橋町に於ける未曾有の光景を呈したり。

①幕に包まれていた銅像。
中村是公銅像建設会長(東京市長)の式辞。



廳(やが)て開会を告ぐる一発の煙火冲天に轟くや、主賓渋沢院長並に渋沢子爵の同族を始め来賓一同は予て設らへたる銅像前の式場に参入。
一同着席を了はらるるや、当日の司会者田中本院幹事先づ開会の辞に次ぎ銅像建設の経過並に工事報告を為し、次で中村市長は銅像建設会長の資格にて式辞を述べられ、

②除幕の瞬間。
銅像の下に栄一の孫昭子と田中太郎養育院幹事。



右終るや 渋沢子爵令孫昭子嬢(十一歳)は田中幹事の介添へにて幼なき花の姿を銅像の直下に運ばれ、肅然として除幕の紫紐を惹けば、紅白色鮮やかなる覆幕は微風に翻へりつゝ颯とこべり落ち、見るも心地よき白色の花崗岩台石上、十有六尺の

中空に温容玉の如き（やさしく
おだやかな表情顔かたちが玉石
のように美しい）子爵の青銅坐
像活けるが如くに現はれ出でし
かば、急霰（きゅうさん）にわ
かに降るあられ）の如き拍手と
歓呼は期せずして会衆の間に湧
き起これり。

斯（か）くて芽出度く除幕終れば洪
沢院長はやをら老軀を演壇に運ばれ、
感慨無量の態度にて鄭重なる謝辞を述
べられ、次いで若槻内務大臣及び平塚
東京府知事の孰れも老子爵の功績を称
へたる懇篤なる祝辞朗読あり。

最後に小坂本院常設委員長は建設会
専任理事として閉会辞を述べられ且つ
同氏の発声にて子爵の万歳を三唱し、
之れにて滞りなく式を閉ち直に來賓
を本院大講堂内に設らへたる食堂に案
内し午餐を饗応せり。

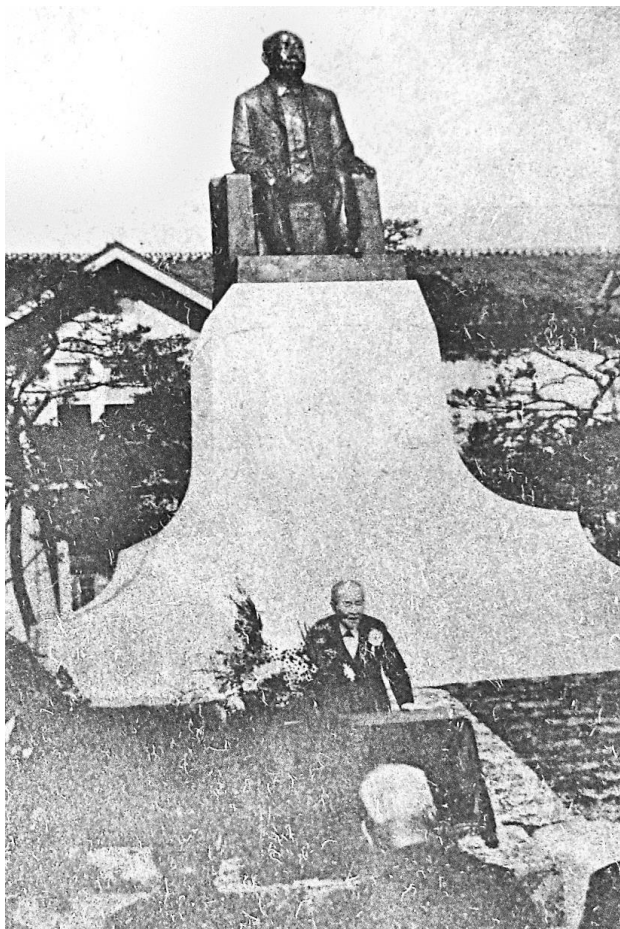
斯くて宴方に酣（たけなわ）なる頃、
小坂専任理事より一場の挨拶を述べら
るゝところあり。

次で近藤東京市会副議長は市会議員
を代表して乾盃辞を述べられ、老子爵
の万歳を祝する歓呼の裡に一同の乾杯
あり。

終りて再び洪沢子爵の蘇東坡（そと
うば 約千年前、中国北宋の詩人・政
治家）の喜雨亭の記に因（ちな）める
含蓄深き一場の演説あり。

最後に枢密院議長穂積陳重男は洪沢子
爵家親族を代表していと鄭重なる謝辞
あり。

和氣霽々（わきあいあい）裡（り）
うち）に散会せしは午後一時過ぎなり
き。



③洪沢栄一の謝辞
青淵澁澤榮一傳 昭和16年刊 p78より

銅像の除幕式は一九二五（大正一
四）年一月一五日に開催されました。
記録の原文は、東京市養育院月報
第二九二号・第二一一―一三頁（大正一
四年一月）に掲載されたもので、さ
らに「洪沢栄一伝記史料」第三十巻
二三七―三三八ページに転載されていま
す。

「洪沢栄一伝記史料」の本文はイン
ターネットで公開されています。



新型ウイルスに感染した 渋谷栄一

宮本孝一
老年学情報センター

櫻園通信 62 令和3年1月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋谷記念コーナー
連絡先: 老年学情報センター

二〇一九年の冬に中国で感染が確認されて以来、新型コロナウイルスは、世界中に広がりパンデミック（世界的大流行）となりました。人に病気をもたらすコロナウイルスはそれまで六種類だけでした。それらとは違う遺伝子・形・性質をもったコロナウイルスが出現して人間に病気を引き起こしているため「新型」と呼ばれています。ウイルスは人や動物の細胞を使って自分のコピーを作り増殖します。このときウイルスの遺伝子がうまくコピーされず、少し違う遺伝子をもつウイルスができることがあります。

これを変異といいます。遺伝子がウイルスの性質を変えるほど大きく変化し、その新しい性質がたまたま感染拡大に有利なものだった場合は感染が広がることになります。

新型コロナウイルスも、もとはほかの特定の動物に感染していたコロナウイルスが、変異により人間に感染するウイルスになったと考えられています。しかしまだその起源は判明していません。

毎年冬に流行するインフルエンザも、ウイルスによる病気です。インフルエンザウイルスも変異しつづけているため、流行するウイルスの遺伝子・性質も毎年変わります。

今から百年前、恐しい性質をもつ新型インフルエンザ・ウイルスが出現しました。

四十度を超える高熱・頭痛・筋肉痛、肺炎、耳や鼻からの出血、肺に水がたまる（肺水腫）、そして数日で死に至るインフルエンザです。犠牲者のほとんどは健康な若者で、致死率は通常のインフルエンザの二十倍以上でした。

新型インフルエンザは一九一八（大正七）年の春にアメリカで流行した後ヨーロッパで広がりました。当時は第一次大戦の最中で、参戦していた国は感染を隠していましたが中立国のスペインの流行が報道され、「スペイン風邪」と名づけられました。スペイン風邪は夏になると収まり、寒くなると復活。結局3回大流行を起こしました。スペイン風邪は、一九一八年の八月末から日本でも大流行が始まりました。新聞記事では山間部で「感冒のため一村全滅」という報道も見られるような状況でした。



一二月にはやや流行が収まりましたがその時点での感染者数は国内総人口の約四〇％に当たる人数でした。翌年の春、渋沢栄一もこの恐しいウィルスに感染してしまいました。

その時の記録が残っています。

カタカナをひらがなに書きかえ、改行や付記、濁点を加えています。一部漢字をかな表記にしています。

(略) は原著でも略になっています。

渋沢栄一日記 大正八年(渋沢子爵家所蔵)

三月二日

(略) 三月一日より四月三十日までの日誌は、前記の如く大患に罹りしため詳悉するをえず、よって病間殊に記憶するものを左に記載して他日の参考に供すと云爾(うんじ・しかいう＝強調) ※他日の参考に供することとする、ぐらいの意味が。

(略) 十日はかつて渡来せるジュー博士の歓迎会、姉崎博士近く仏国へ渡航につきその送別の宴を開催のはずなりしも、病中につき延期し、

来る十七日と定めたり。けだしそのこのに至りなば病も快方と予期せしも、ついに当日も出席するを得ざりき。

十七日阪谷男爵・姉崎博士来話、けだし当日はジュー博士の歓迎と送別との宴会につき、阪谷男には余に代りて来賓に接伴し饗応に尽力せられんことを請い、姉崎博士には渡仏後の注意につき平日の企望を陳述す。

時に病いまだ愈えず苦悶強くして談話意の如くならず。幾回となく氷片をもつて口中を潤してようやく意見の幾分を述べるを得たるなり。

而して(しこうして＝そして)そのため熱度五・六分を増したるを見れば、いかにその日の談話の苦痛なりしやを知る得べし。

二十三日姉崎博士再び来りて明日発足の由を告げらる。よって我が使節及随行人士への伝語または米国及英仏なる知人への音信等をたくす。

(略)

【伝記史料 注】栄一、この年三月一日より四月末にいたる間、流行性感冒により病床にあり。

このとき渋沢栄一は七九歳。ひどく具合が悪くて人と話すのもつらいのに、口に氷を入れてなんとか対話しようとする様子が書かれています。無理をしたらためそのあとすぐ熱が上がってしまいました。渋沢栄一はスペイン風邪で二カ月近くも病床に伏していたんですね。

記録の原文は渋沢栄一の日記で、「渋沢栄一伝記史料」第四 十巻 三六・三三七ページに転載されています。

「渋沢栄一伝記史料」の本文はインターネットで公開されています。





渋沢栄一と養育院 はじめの1歩

宮本孝一 老年学情報センター

櫻園通信 63 令和3年1月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先: 老年学情報センター

- 1872（明治5）年 営繕会議所発足。共有金による公共事業開始。営繕会議所の附属機関として養育院創立。
- 1873（明治6）年 渋沢栄一、大蔵省を辞職して実業界へ。
- 1874（明治7）年 渋沢栄一、東京府知事より営繕会議所の共有金取締を委嘱。
- 1875（明治8）年 営繕会議所は東京会議所に改名。
- 1876（明治9）年 会議所廃止。養育院の運営は東京府営に。渋沢栄一は東京府より養育院事務長に任命される。
- 1879（明治12）年 組織再編で事務長は院長に改名。これにより渋沢栄一は養育院院長に。

渋沢栄一が（昭和六年）十一月に亡くなったあと、十二月に社会事業団体による故渋沢子爵追悼講演会が開かれました。

このとき演者の一人清浦奎吾伯爵は、渋沢栄一が「自分が社会事業に関与することになったのは、深く思索をして計画した結果でなく、偶然なんだ」とよく語っていたことを紹介しています。

（*1）

さらに、共有金（江戸幕府による窮民救済のための積立金）を管理する組織「会議所」で管理者に就いたため、会議所管轄の養育院の運営にも関わるようになった。これが渋沢栄一が社会事業に関わるようになる始まりだったと講演で話しています。

では、渋沢栄一が営繕会議所の運営（共有金の運用）に関わる経緯はどのようなものだったのでしょうか。

東京商工会沿革始末（東京商工会残務整理委員編纂）（*2）に次のように書かれています。カタカナと一部の漢字をひらがなにしました。

下有志者才幹（才能、腕前）ある者某々等を委員に依嘱せられんことをもつてしたるに、府知事はその推薦を納（受け入れること）れ、明治七年十一月をもつて渋沢栄一等に共有金取締の事を囑托し、その後翌明治八年四月をもつて此諸氏を会議所の委員に任したりき。

東京会議所の仕事は煩雑で混乱。運営する委員では手が回らない。事業費の原資である共有金（七分積金）も減る一方で会議所運営停止も時間の問題。そこで東京会議所の委員たちは東京府にいる有能な人材を何人か選び、会議所の運営に加えてもらうよう東京府知事大久保一翁に相談。久保一翁は会議所の申し出を了解。会議所に共有金取締の囑託員として新たに任命された三人のうちの一人が渋沢栄一。

東京会議所は道路橋梁修繕事務の外に養育院事務、共同墓地事務、瓦斯灯及街灯事務、商法講習所事務を管理処分したるにつき、委員は皆その事務の煩擾（わづわしい）ほど乱れるにして整理完全せざるを憂ひ、且共有金原資の漸次減少して余分なきに至るを憂ひ、府知事に推薦するに府

国家官僚を辞職し実業家に転身して
まだ一年目の渋沢栄一。会議所の委員
に推薦され、東京府知事大久保一翁に
東京会議所の運営を任せられます。

引用した「渋沢栄一伝記史料」第十
二巻では同じページに続けて「会議所
伺」という記事があり、注として**明治
七年十一月東京会議所共有金取締トナ
リ、同月十七日始メテ新場橋際東京会
議所二出勤ス**と付記されています。

明治七年十一月一七日。渋沢栄一、
東京会議所に初出勤。

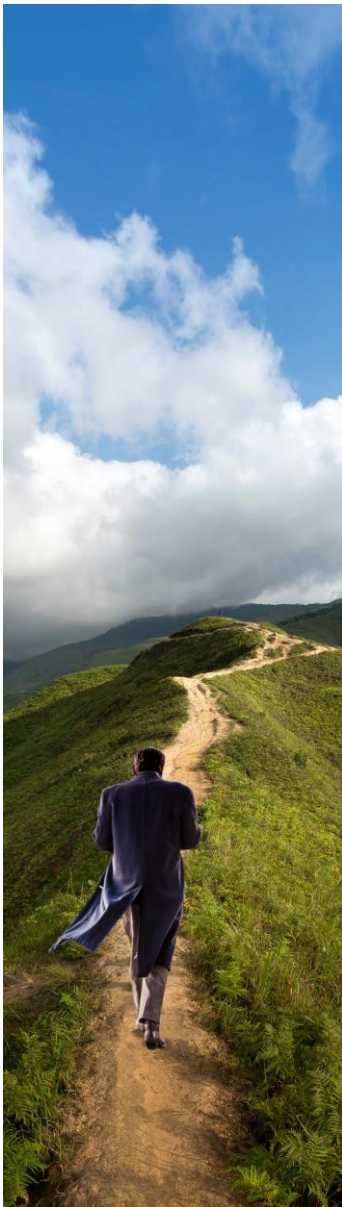
渋沢栄一の社会福祉事業の第一歩は
ここから始まりました。このとき渋沢
は、自分が実業界よりも長く養育院
長職や、全国的な社会事業の振興に取
り組むことになるとは思いませんかつ
たでしょう。

渋沢栄一自身の言葉としても**私が
東京市の養育院に従事するやうにな
りましたのは明治七年でございます
た**^{*3}と会議所の共有金取締就任が養
育院運営に関わるそもそもの始まり
と語っていたことが記録に残ってい
ます。

さて、一九二九（昭和四）年の楽
翁公百年祭の講演で、渋沢栄一（当
時八十九歳）が気になる一言を言っ
ています。

**共有金取締を申付けられるより前に、
私は養育院の事業を引受けて微力を
致すことになつて居りましたが、**^{*4}

これはどういうことでしょう。
会議所運営を監督することになり、
たまたま会議所の付属施設として養
育院があつたからなりゆきでその運
営にも関わるようになった・・・と
いうことではなさそうですね。
では、共有金取締役就任以前の、
どの段階で誰との間で「渋沢栄一が
養育院の事業を引き受ける」と決
まっていたのでしょうか？
謎です。



- *1 「竜門雑誌 第519号 第118-1151頁 昭和6年12月 社会事業団体催故渋沢子爵追悼講演会」 渋沢栄一伝記史料 第57巻 p.798-799
*2 「東京商工会沿革始末（東京商工会残務整理委員編纂）第10-11〔明治25年5月〕」 渋沢栄一伝記史料 第12巻 p.280-281
*3 「竜門雑誌 第498号・第113—117頁 昭和5年3月 青淵先生説話集 松平楽翁のこと々も」 渋沢栄一伝記史料 第49巻 p.133-136
*4 「竜門雑誌 第489号・第116頁 昭和4年6月 楽翁公百年祭にて 青淵先生」 渋沢栄一伝記史料 第49巻 p.129-132



貧民の帝都

養育院の時代背景

宮本孝一 老年学情報センター

櫻園通信 64 令和3年1月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先: 老年学情報センター



図1 江戸の大きさ

図2 武家地と町人地



図3
江戸城と武家屋敷（オレンジ色）から、
人が消えた。

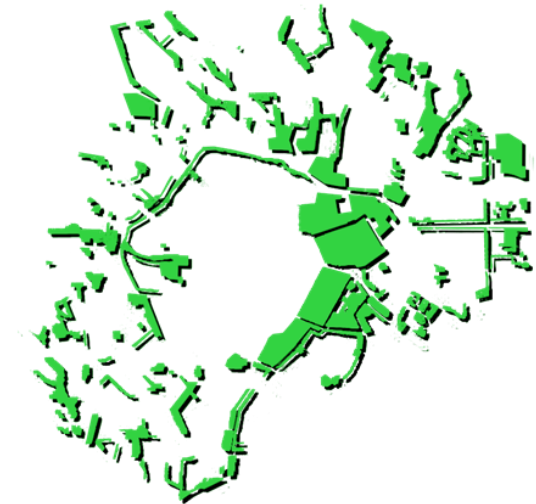


図2・3は、松山恵「都市空間の明治維新」
(ちくま新書2019) p 17の図を宮本改変

人口百万人の大江戸八百八町。山手線の内側と隅田川の両岸を合せたぐらいの範囲が江戸でした。
現在の東京二十三区よりずっと小さい広さです。
江戸の土地の七割は武家屋敷で占められていました。全国諸藩の大名の妻子を住ませ、大名が二年ごとに参勤交代でやってきて一年江戸で暮らす屋敷や家来たちの屋敷です。將軍家に直接仕える旗本や御家人の屋敷もありました。

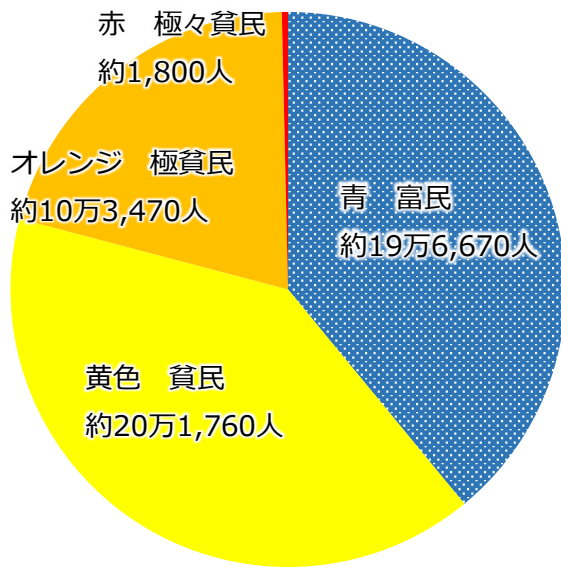
左の地図のオレンジ色の部分が武家屋敷のある武家地です。その隙間を埋めるように分散している緑色の部分が町人が住む地区と寺社です。
江戸百万人の人口の半分は、武家地に住む武士でした。残り半分が町人です。
◆
幕末、江戸城を官軍に明け渡すと、各藩の武士は一斉に自分の藩に帰りました。豊かな商人たちも戦乱を恐れ、江戸から出ていきます。
江戸の人口の半分が突然いなくなったのです。

江戸城も武家屋敷も人の姿が消えました。江戸は無人の土地だらけで、骸骨のような有様です。(図3)
江戸に取り残されたのは、町人と藩に連れて行ってもらえなかった下級武士でした。
どんな仕事であれ給金を払う者もいなくなり、多くの町人や下級武士は失業しました。物資の流通も途絶え、貧しい人を助けるしくみもなく、多くの人が亡くなりました。
明治はじめての東京でも浮浪者があふれる状況は続き、明治五年に養育院が作られます。

明治元年に東京府は地域の有力者に命じて貧困者の数を調査しました。その結果が残っています。東京都編「東京市史稿 市街篇」(一九六二)

東京の住民を、富民(家屋を所有)・貧民(借家住まい)・極貧民(七分積金でも救済を受けた者)・極々貧民(救済を希望している者)の四つに区分して調査したものです。

合計が約五十万人で、江戸の人口百万人が半減したことがこの調査でもわかります。



借家住まいの人をすべて貧民とみなすことはできませんが、極貧民・極々貧民という住む家がない困窮者が十万五千人もあり、東京の人口の二十%を占めていました。

東京に住む人のなんと五人に一人がホームレスだったことがわかります。そこには当然、大人だけでなく子どもも含まれます。



明治維新のころ、橋の下をねぐらにしていた孤児たち
「貧民の帝都」p23より

明治時代にはいると、全国で凶作が続き、農地を捨てた農民が東京に流入して貧困層は膨れ上がりました。

企業が増え工場の建設が進むと、貧困層の一部は工場労働者となりますが、日露戦争・第一次世界大戦後の不況、物価上昇、貧富の格差の拡大により、産業の発展の陰で生活困窮者は増えつづけた。東京の各地に貧民窟(スラム)が形成されます。

日本の近代化と並行して生じた貧困の状況と、養育院やほかの救貧施設の活動を詳しく説明した本に塩見鮮一郎著「**貧民の帝都**」(文春新書 二〇〇八年)があります。

「貧民の帝都」は養育院六十年史・百年史・百二十年史などの養育院刊行物とともに、養育院開設前史からその後の養育院の事業の歴史をたどることができる書籍です。

養育院本院は移転を繰り返しましたが、その位置を現代の地図で示した図(本郷・上野・神田・本所・大塚・板橋)が本書に掲載されており、養育院があった場所を知る貴重な情報です。

異形の神への願い

松平定信の心願書

宮本孝一
老年学情報センター

櫻園通信 65 令和3年1月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先: 老年学情報センター

明治のはじめ、幕府瓦解による江戸市中の経済混乱で職を失う者が続出し、新首都東京には生活困難な極貧の大人・子どもがあふれていました。そうした人たちを収容する施設として「会議所」附養育院が設けられました。会議所とは、江戸幕府が積み立てていた莫大な救済基金「七分積金（しちぶつみきん）」を管理運用する組織で、明治五年に作られました。

江戸幕府の救済基金「七分積金」は、老中松平定信が始めた事業です。飢饉発生など非常時にそなえる「備荒貯蓄」と、貧しい人に米を支給する目的で、お金と米が蓄えられました。寛政の改革の一環です。

当時、大飢饉により米の価格が上がり、全国各地で暴動（一揆・打ちこわし）が起きていました。

老中松平定信は、世の中の混乱が収まることを神に願う「心願書」を書き、本所吉祥院の歓喜天（かんぎてん）という神に奉納しました。

心願書は「米の値段が下がり、お金や食料の流通がよくなって、幕府の政事の効果が人々にいきわたりますよう、自分の命と妻子の命をかけてお願いします。もしかかなわないのなら、今すぐ自分の命を奪って死なせてください」と書かれています。命を顧みない、文字通り必死の懇願です。この心願書の写しは渋沢栄一の解説文とともに額装され、渋沢栄一院長時代から養育院の院長室に掲げられていました。



白河楽翁の心願書と渋沢栄一の解説

渋沢栄一の時代から、旧養育院長室に、額が飾られていた。昭和20年4月の米軍による空襲で、養育院の多くの部分が焼夷弾に焼かれた。本院の多くの建物は焼失、107名の犠牲者が出、コンクリートの代替像になっていた渋沢像も焼け焦げた。養育院に関する多くの歴史的資料もこのとき焼失したが、養育院長室からこの額は持ち出された。それほど大切にされたものであり、現在は装幀しなおして展示ケースに収まっている。江戸時代、白河藩主松平定信（白河楽翁）が筆頭老中になり寛政の改革に乗り出したとき、吉祥天に納めた心願書の写しである。松平定信の作った七分積金の制度に対する感謝の意こめられた渋沢の賛（解説文）が組み合わされて、一つの額にしてあるのである。



まず右側の白河楽翁の心願書である。

明治のはじめの養育院の運営資金は松平定信が創設した七分積金によるものであるが、渋沢栄一がそれを知ったのは、会議所の運営メンバーに加わり養育院運営に間接的に関わるようになってからです。松平定信の心願書も、渋沢は養育院の職員から教わりました。

渋沢は「今ある養育院は、楽翁公（松平定信）あつたればこそ」と考えました。（参考 桜園通信二十四号）

渋沢はこの心願書についてたびたび語っていますが、とくに「自分だけでなく妻子の命をかけた心願で「若し自分の願を聞き届けて下さらぬならば、どうぞ私を殺して戴きたい、独り私の命ばかりでなく、妻子眷族が罰を受けても、一向恨みと思ひませぬ」（*1）という点には必ず触れました。

そして、それは**定信公の容易ならぬ覚悟・熾烈なる精神・身を捨てかかる大覚悟**の表れと渋沢は説明していました。

さて、松平定信が心願書を奉納した歓喜天（かんぎてん）とはどういう神様でしょうか。歓喜天は仏教の守護神のひとつで、聖天（しょうてん）ともいいます。歓喜天は一人ではなく、象の顔をした男女の神が立って抱き合っている姿をしています。二人で一つの神という変わった姿です。

その神像は厨子に納められて秘仏として扱われることが多いようです。

渋沢栄一は、自身の著書で定信の心願書について「定信公の決意の熾烈さ」とは違う観点の意見を書いていました。



怪異不可思議の事を信ずると否とは、必ずしもその人の学問・知識の程度によるものではないらしい。存外な学者で幽霊を信じたりする者がある。

（略）

白河楽翁公の如きは、学問もあり智慧も優れ、精神の立派な人物であらせられたにかかわらず、従来談話した中にも既に申述べ置けるごとく、幕府の老中に任ぜらるるや、自分の一命は素より、



妻子眷族の生命までも懸けて、窃に深川の聖天様へ起誓せられて居る。楽翁公に似合はしからぬ事だと思ふが、怪異を信ずると否とは、その人の学問なぞよりもむしろ、かえつてその人の教育やら境遇に因ることゆえ、楽翁公は御出生が元来殿様なるため、幼少の頃より奥女中なぞにかのとき迷信じみた思想を吹き込まれて来た結果、我々から観れば馬鹿気て見ゆるごと起誓などを、正心誠意のほとばしつた余り、あえてせらるるに至つたものだらうと思ふ。（略）

この文章は渋沢栄一が八十二歳のときに刊行された著書に載っています。

江戸の困窮民を新制度で救った楽翁松平定信の偉業を生涯称賛し続けた渋沢栄一ですが、異形の神に自分だけでなく妻子眷属の命も捧げるという行動には強い違和感を感じていたようです。

非合理的な思考を退け、何事も理性的合理的に考えることを旨とした渋沢の態度を見ることができます。

聖天



平安時代の図像集『別尊雜記』
（心覚撰）巻四十二より

*1 東京市養育院月報 第339号・第114頁 昭和4年10月 多摩川園に於ける『ロータリー』倶楽部の院児招待に対する謝辞（養育院長子爵渋沢栄一）：渋沢栄一伝記史料第30巻 p.263-266

*2 実験論語処世談（渋沢栄一著） 第599-601頁【大正11年12月】『流行の神様』：渋沢栄一伝記史料第1巻 p.179-



懸隔 けんかく

渋沢の行動原理を知る手がかり

宮本孝一 老年学情報センター

櫻園通信 66 令和3年1月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先: 老年学情報センター

江戸時代と明治時代の境目、明治維新のさなかに渋沢栄一はヨーロッパにいました。徳川慶喜の弟昭武のパリ万博参加にあたり幕臣として渋沢は随行しました。このとき最も心に残った体験は「外国では**役人と商人の懸隔（けんかく）**が日本の如くでない、是は何とかしなければならぬと云ふ事に気が付た」ことでした。^{*1}

江戸時代、土農工商で商人は最下層の身分。武士と対等に話すことなどできません。ところが徳川昭武一行の世話役の銀行家と昭武の家庭教師をした陸軍大佐はまったく対等の態度で接している。商人と軍人（役人）が対等であることに渋沢は驚嘆しました。

渋沢の実家は染料の藍玉を製造・販売する農家。渋沢も十代の頃から藍の買い付けで商才を発揮していました。そのころ農家・商家に対する武家の理不尽で差別的な態度に強い怒りを覚えました。

明治時代になり、政府の役人を勤めたあと実業家に転身しますが、それを引き留めようとした人に「日本は官吏である

ことを無上の光栄とし、商工業者は蔑視される。自分は商人の品位を高め、商業・商人を社会の最も上流に位置付けた。国家の基礎は商工業にあり、だ。そのため論語を思想とした経営をするつもりだ。」と答えます。

明治の初めまで、渋沢栄一の行動原理は「商人を見下す官尊民卑の打破。商業者の地位向上」でした。封建時代からいまだに残る**役人と商人の懸隔**をなんとかする、とはそういうことです。

懸隔（けんかく）は、現代の言葉ではどんな言葉に当たるでしょうか。それを考えるために次に、渋沢が晩年に使った懸隔をピックアップしてみます。

・殊に工業が段々進むに就て、追々に生存競争が烈しくなりて**貧富を懸隔**せしめ（略）

・物質的の進歩が益々進むとしたならば、**貧富の懸隔**は益々甚しくなることを予期せざるを得ないのである。

竜門雑誌 第二七〇号・第一一一九頁 明治四三年一月 ○慈善事業の過去現在（青淵先生） 渋沢栄一 伝記資料第30巻p.813

・国民の富力増進に努むる所ありし結果、**貧富の懸隔**著しく、随て貧民は疾病に苦しむ場合にも之を療養する道なきが如きを致せりことを予期せり

竜門雑誌 第二七六号・第四九一五六頁 明治四四年五月 ○恩賜財団に関する協議会 渋沢栄一伝記資料（DK310009k-0006）

第31巻p.65

・協調会が大正八年に出来まして、政府も助け資本家も加入して、其協調に努めて居ります。即ち資本家と労働者の協調を図つて居ります。更らに第三には、**貧富の懸隔**を防いで居ります。之は富めるものを貧しくし貧しいものを富まするのでは無く、貧者の懸隔を補ふにありませう。之が私の老後国家に対する義務と考へて居ります。

青淵先生演説速記集（三） 自大正十年四月至大正十三年一月 雨夜譚会本 渋沢栄一伝記資料（DK490210k-0001）第49巻p.653

・もう一つは**貧富の懸隔**であります、**此両者の隔離を接近せしめて調和を図つて行く**と云ふこと、即ち純然たる社会事業である。今日は学者間では済民恤救と云ふことは努めて言はぬやうにして居る、是は理論上適當の注意であります。

併し事は矢張濟貧恤救である。現に東京市の養育院の如きは私は明治初年から必要と思ふて、之に関係して最早四十九年目になります。

銀行通信録 第七五巻第四四七号・第一―一三頁大正二年一月 物質界及精神界に対する予の希望 子爵 渋沢栄一 渋沢栄一伝記資料 (DK510003k-0002) 第51巻p.18

● 貧富の懸隔（または隔懸）：渋沢栄一の言つ懸隔は現代の**格差**という言葉に置き換えられるように思います。

晩年の渋沢栄一は、社会事業家として、**貧富の懸隔**、現代でいう**貧困格差・所得格差**を憂い、格差拡大への対処に取り組みました。

では、渋沢栄一が考えた貧富の懸隔対策とはいかなるものだったでしょうか。

◆ ・貧富の懸隔を融和するといふ、即ち濟貧恤救の事務であります。此救済の事は、動もすると伝説の喜捨となりて、只物を捨て、窮乏の人に施すを主義としますけれども、人道的若くは経済的に言ふならば、単に喜捨ばかりではいけない。

先づ第一に防貧を努めねばならぬと思ひます。斯く論ずると所謂**社会政策**となつて、学者・政事家の領分に立入るかも知れませぬが、貪しき人を救護し又は防貧の措置をすることは、人道上から言つても、政治上から考へても、経済上から観ても、必要欠くべからざることではないかと思ひます。竜門雑誌 第三七五号・第一―一九頁 大正八年八月 ○春季総集會に於て 青淵先生 渋沢栄一伝記資料 (DK42011k-0005) 第42巻p.678

・最も其中にも力を用ひなければならぬと思ひます事は、**既に困難に陥つた場合**に之を救ふよりも、**未だ其所に至らぬ以前に之を救済するといふ即ち濟貧と防貧との差別でございます**。勿論濟貧を致さねばなりませんけれども、併し望むらくは一步進んで防貧の手段が追々に制度上にも或は地方団体に於ける設備にも、或は個人的事業の上にも進んで参りましたならば、如何に一方からして貧富懸隔せしむる経済上の進歩が働きて行くとも又之を防ぐことが伴つて参りませう。又さう参らせたいと思ふのであります。

慈善 第三編第二号・第四五―五一頁 明治四四年 本會第四回總會開會の辭（會長男爵渋沢栄一） 渋沢栄一伝記資料 (DK300047k-0003) 第30巻p.453-457

◆ 渋沢栄一が院長として養育院運営に関わると同時に事業家として活躍していた頃は「**貧困は個人の責任（自業自得）**」だが、人道として援助は必要だ」という、事後的な救済の必要を訴えていました。渋沢のいう**濟貧**です。

しかし日露戦争のあたりからは晩年まで、渋沢栄一は**貧困に陥らないようにする社会のしくみこそ第一と唱える**ようになります。**濟貧より防貧**、です。

公利目的の企業家として商人の地位向上↓ 貧窮者を助ける企業家精神↓ すべての人が最低限の生活が確保できる社会づくりの一部としての企業活動、と渋沢栄一の人生哲学は三段階で変化しました。

日本と欧米諸国の比較から見える制度整備などの**懸隔**、あるいは国内の社会に見られるさまざまな種類の**懸隔**を分析することで、渋沢栄一の行動原理は練り上げられたように思えます。



渋沢栄一秘書 白石喜太郎の驚き

宮本孝一 老年学情報センター

櫻園通信 67 令和3年1月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先: 老年学情報センター

渋沢栄一の秘書が、亡くなる三年前、八十八歳の渋沢の様子を書き残しています。

ラジオ放送で渋沢が講演をした日の朝と、放送の様子です。

講演は「御大礼に際して迎ふる休戦記念日に就て」というもので、第一次世界大戦休戦の記念日に毎年、社団法人国際連盟協会会長としてラジオ講和を行っていました。東京の愛宕山に日本放送協会の放送局ができて日本にラジオ放送が始まったばかりの時代です。

この日は、第十一回休戦記念日の放送。一国の利益のみを求め他国を顧みないのは正しい道徳ではない。共存共栄・経済協調によつてはじめて国民は安心して生活ができる。政治経済と道徳の一致が必要と説いています。

まずはその日の朝の様子から。

読みやすいよう、漢字をかなに変えたところや改行したところがあります。

午前九時飛鳥山邸へ行く。

このころ朝の遅い子爵がもうすっかり用意を整へて、今日の講演の原稿に手を

入れておられる。

西洋館の居間の北側の窓に面し、青羅紗を張つた低い円卓を前にしておられる。

正面からは弱い光が差し、やや後の東側の大きな窓から美しい朝日が勢よく飛込んでいます。

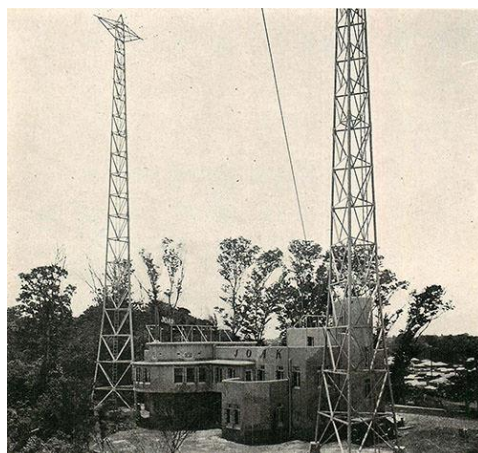
強弱二様の光の相交錯する辺りに、九十に近い子爵が眼鏡も掛けずに筆を運ぶ様はどうしても画である。

明窓浄几と題すべき形である。(略)

国際知識 第二二巻第二号・第五五―五八頁昭和七年二月 休戦記念日の想ひ出 故渋沢子爵秘書役白石喜太郎 (PK370052k-0005) 第37巻 p.223-224



九時半ごろ渋沢は書き終わった原稿を秘書に読ませて意見を聞きます。秘書は二、三気になった所を指摘。そこでまた渋沢は原稿を修正。十時前に邸宅を出て愛宕山の放送局へ。



小さな放送室に入ると、アナウンサーとしばし会話。「一休話し方はどうなのがいのですか。人によつては誠に聞き苦しいことがありますか……」「調子の早い方は具合が悪うございます。ゆっくりの方がよく入るようでございます。かん高い方でも早くなければ、そんなに聞き苦しくはありません」

そして、いよいよ放送スタート。

「JOAKこちらは東京中央放送局であります。これから御大礼記念国際講演に移ります。有線中継でありますから準備の都合で、しばらくそのままお待ち願ひます」

またしても異常の沈黙が広がる。事実一分経たぬかも知れないが、非常に長いような気がする。やがて沈黙は破れた。「お待たせいたしました。それではこれから御大礼に際して迎ふる休戦記念日に就て、と題する子爵渋谷栄一氏の講演がでございます」

子爵はおもむろに原稿を拡げ、眼鏡なしで始められる。

「私がただいま紹介された渋谷栄一であります。」

反響のない室のせいかやや低く聞えるが、語調と云ひ、語勢と云ひ、極めてよい。とても朗読とは思へぬ話し振である。ときどき原稿をはなれて註釈を加へられまた原稿に戻るのが、極めて自然で、原稿を知らぬ人には恐らく分るまいと思はれるほどである。

咳を一度されたきりで、水一つ飲まれず、元気に続けられる。

「これで私のお話を終ります」と結ばれてもなお話したそうに見えた。アナウンサーの結辞をまつて静かに室を出る。吉例によつて記念撮影である。

(略)

国際知識 第二二巻第二号・第五五―五八頁昭和七年二月 休戦記念日の想ひ出 故渋谷子爵秘書役白石喜太郎 (DK370052K-0005) 第37巻p.225-226



この渋谷栄一の秘書白石喜太郎の回想ですが、渋谷の特徴に繰り返し触れています。白石にはこれが渋谷について特に強調したかったところなのでしょう。

「九十に近い子爵が眼鏡も掛けずに筆を運ぶ様」「おもむろに原稿を拡げ、眼鏡なしで始められる」

人間は四十歳ごろから眼球のレンズ（水晶体）が固くなり、近いものにピントが合わなくなります。老眼です。

また高齢になると白内障や緑内障などの目の病気が起こりやすくなります。

しかし渋谷栄一は八十八歳で眼鏡無しで原稿を読み書きしていたのです。



この日のラジオ放送は録音され、国際連盟協会によりレコードが作られました。また、現在もこのラジオ放送の音声を聞くことができます。渋谷史料館発行のCD「肉声で聞く渋谷栄一の思想と行動」に収録され、史料館オンラインショップで販売されています。

養育院巣鴨分院 元孤児たちが建てた石碑

監修：稲松孝思 顧問医

作：栄畑南美（えばた なみ） 老年学情報センター

櫻園通信 68 令和3年1月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター



東京都練馬区にある児童養護施設・東京都石神井学園。

ここに石碑があります。「気は長く 勤めはかたく 色薄く 食細ふして 心広かれ 栄一書」とありますが、これは渋沢栄一の手によるものです。

「短気にならずに気をゆったりと持ち、しっかりと働き、色欲はあまり持たず、食事は節制をして、心を広く持ちなさい」という意味です。

元々、このことばは、安土桃山時代から江戸時代初期にかけての高僧・天海が語った長寿の秘訣ですが、それを渋沢が引用したのではないかと思います。



裏面



では、どうして渋沢栄一の書
が彫られた石碑が、石神井学園
にあるのでしょうか。

表面



それは、東京都石神井学園の前身が、渋沢栄一が初代院長を務めた養育院の巣鴨分院だからです。

養育院は、1872年（明治5年）に病人、孤児、障害者、困窮者などの保護施設として設立されました。

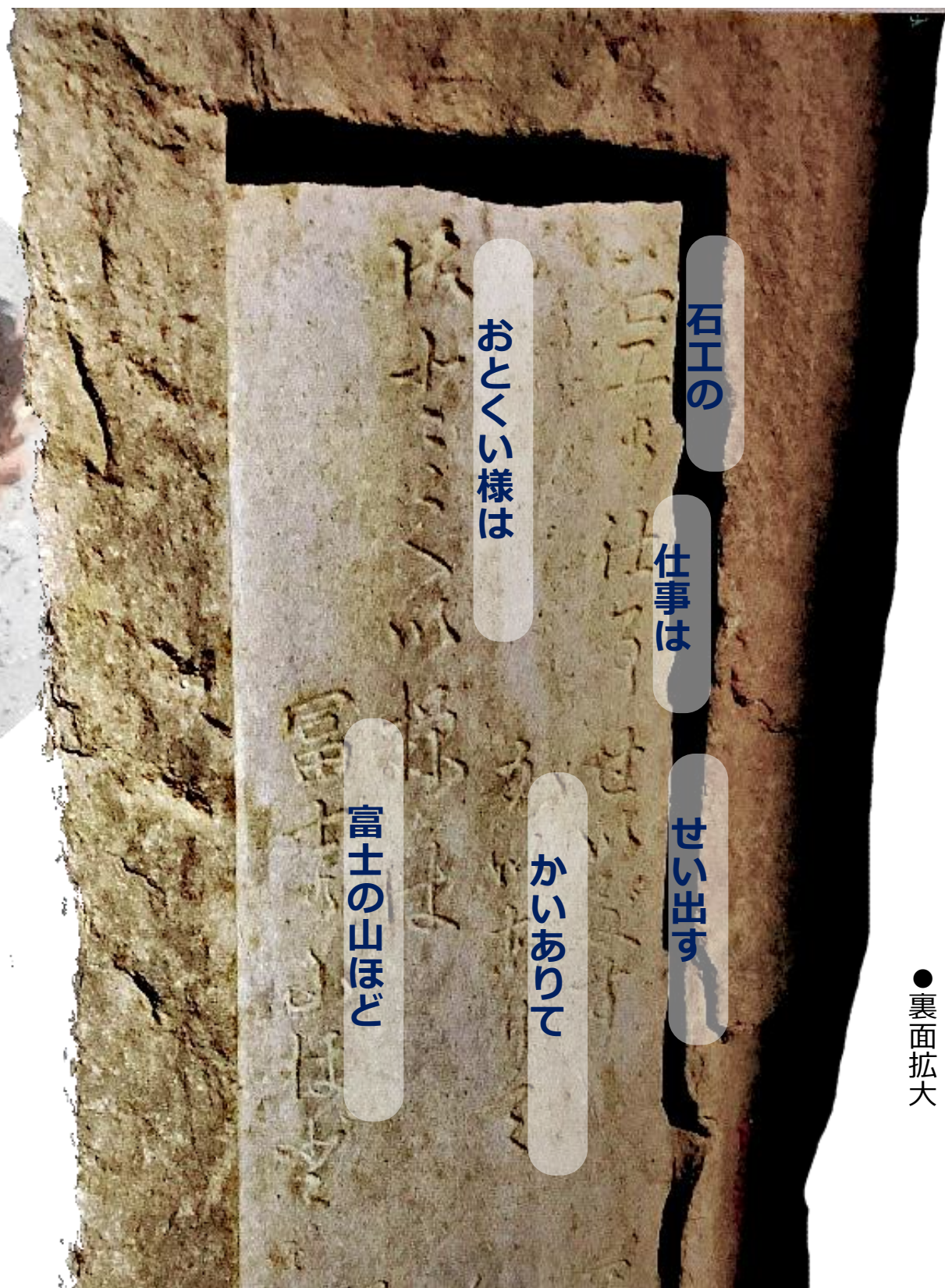
その後、1909年（明治42年）には、施設が手狭になったことと、入所している大人たちからの子どもへの悪影響を懸念して、孤児教育を目的とした養育院巣鴨分院が独立しました。

巣鴨分院は、1942年（昭和17年）に現在の土地に移転し、その時に名称も東京都石神井学園に変更され今に至っています。渋沢は、ほぼ毎月巣鴨分院を訪れ、子どもたちと話をしたと言われています。

この石碑は、巣鴨分院で育った元孤児である石工たちが寄付して建立しました。石碑の背面には、石碑を作った元孤児である石工たちのことばも彫られています。「石工の仕事は 精出す 甲斐ありて おとくい様は 富士の山ほど」とあり、石工として立派に自立大成した様子が伺われます。

養育院から派生した巣鴨分院は、現在に繋がる児童福祉分野の先駆けだったとも言えるのではないのでしょうか。

●裏面拡大



石工の

仕事は

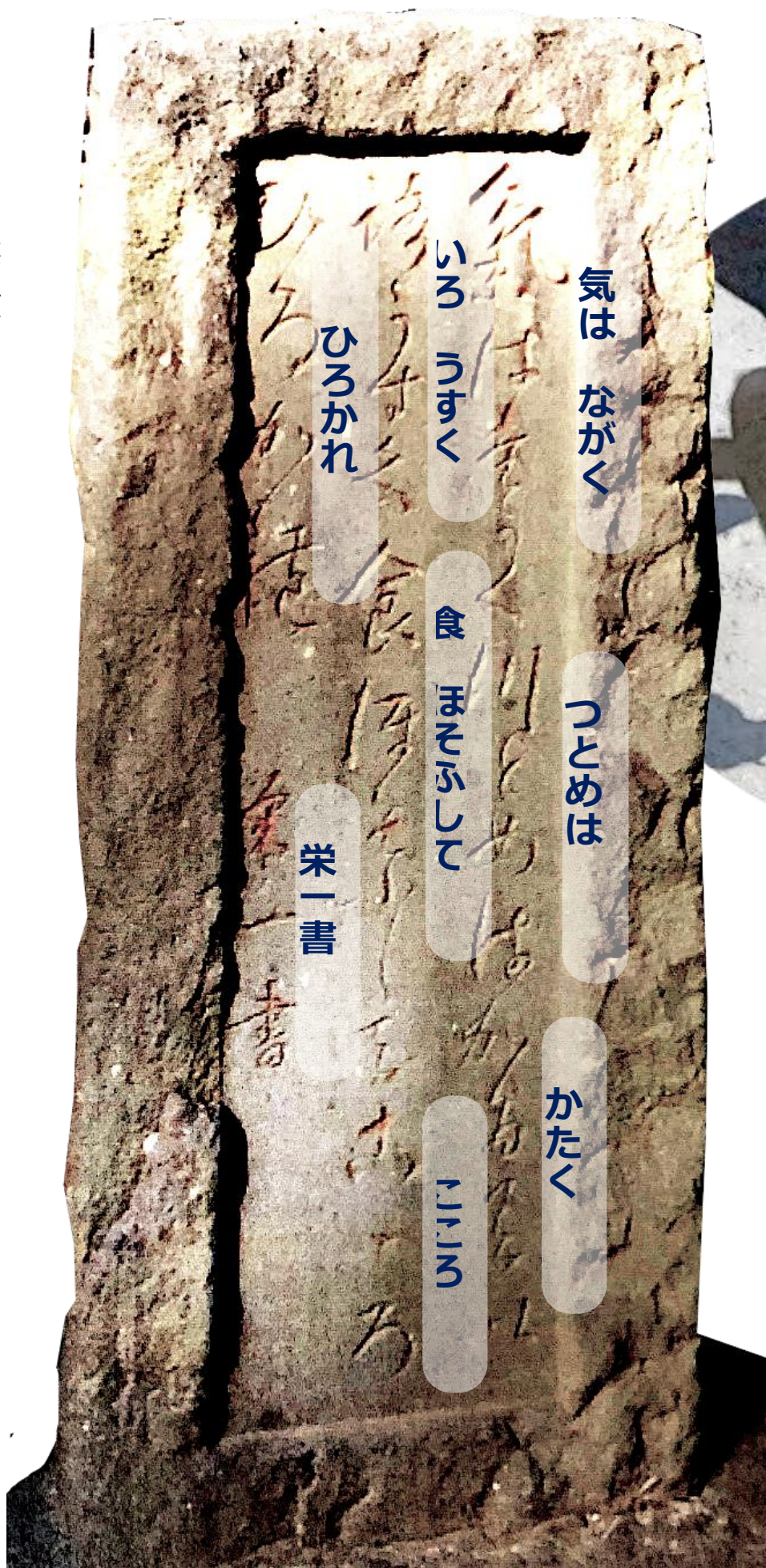
せい出す

おとくいは

かいありて

富士の山ほど

●表面拡大



気はながく

つとめは

かたく

いろ うすく

食 まそふじつ

ふじつ

ひろかれ

栄一書

【参考文献】
稲松孝思「都区職員のための渋沢栄一入門 15 新壱万円札の人 子どもたちの育成、論語と算盤 渋沢と教育・下」『都政新報』2020 年 11 月 27 日、p.8
「成り立ち・沿革」東京都社会福祉事業団東京都石神井学園ホームページ、
<https://www.jigyodan.org/shakujii-gakuen/about/history/> 2021 年 1 月 14 日最終閲覧。

写真で見る 養育院巣鴨分院

東京市養育院写真帖と 創立 60 周年記念写真帖から

櫻園通信 69 令和 3 年 1 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先: 老年学情報センター

監修: 稲松孝思顧問医
作: 栄畑南美 (えばた なみ) 老年学情報センター

正門から見る巣鴨分院 1929 年(昭和 4 年)



東京都健康長寿医療センター（以下、センター）の前身・養育院は、1872 年（明治 5 年）に病人、孤児、障害者、困窮者などの保護施設として設立されました。

センターには、養育院時代の貴重な資料が保存されています。

今回は、保存資料のうち、1910 年（明治 43 年）発行の「東京市養育院写真帖」と、1932 年（昭和 7 年）発行の「創立 60 周年記念写真帖」から、孤児教育施設・養育院巣鴨分院の写真をご紹介します。

養育院巣鴨分院は、入所人数の増加と、養育院にいる大人から子どもたちへの悪影響が懸念され、1909 年（明治 42 年）に独立した孤児教育施設です。巣鴨分院は、1942 年（昭和 17 年）に練馬区の現在の土地に移転し、名称も東京都石神井学園に変更され、児童養護施設として今に至っています。



左の写真は、1909 年 6 月 5 日の巣鴨分院開院記念式で撮影された写真です。創立時から、とてもたくさん子どもたちが巣鴨分院で暮らしていたことが分かりますね。





巣鴨分院では、当時の幼稚園や小学校程度の教育を行っていました。

右の写真は、創立当時（1909年頃）の授業の様子です。



右の写真は、巣鴨分院の幼稚園児たちが輪になってお遊戯をしている様子です。左に立っている先生らしき女性が、バイオリンのような物を持っているのが見えます。



左の写真は、1932年（昭和7年）のひなまつりの様子です。おひな様が飾ってありますね。

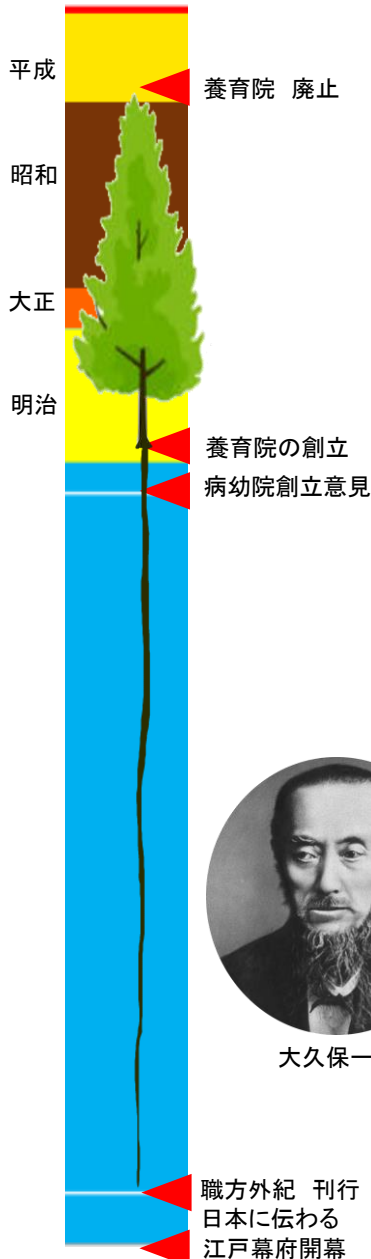
巣鴨分院では、授業だけではなく、季節の行事も行われていました。



【写真出典】
 東京市養育院編著（1910）『東京市養育院写真帖』東京市養育院。
 （1932）『創立60周年記念写真帖』。

養育院の遠いルーツ

宮本孝一 老年学情報センター



大久保一翁

職方外紀 刊行
日本に伝わる
江戸幕府開幕

大久保一翁のプラン 貧民あふれる新首都

東京の府知事に就任した大久保一翁は、幕府の救貧基金「七分積金」を管理する組織「会議所」に諮問し、救貧策を考えさせます。このこととロシア皇子来日に際しての浮浪者収容とが重なり、救貧施設「養育院」が誕生しました。

大久保一翁は、もともと江戸幕府の重臣でした。一翁はそのころすでに養育院とよく似た西洋式の救貧施設のプランを持っていました。

幕末の時期、西洋社会の知識を集めていた一翁は、新施設設置プランを**病幼院創立意見**としてまとめ幕府で提案しました。しかしその直後、異動命令が出され、拒否したため左遷されてしまいます。養育院の原型である一翁のプランは幕府では実現しませんでした。東京府知事で実現したといえます。(桜園通信 二十一号)

蘭学者は知っていた 幕臣時代の一翁は、

書籍や遣欧使節団からの世界情勢の情報を集め、日本の今後の展開を考えようとする開明派でした。一翁の救貧施設のプランも、西洋の福祉施設**貧院・幼院・病院**の知識を基にしたものでした。

幕末期の遣欧使節団に同行した洋学者たちは、これらの施設について現地で調べ、その事業内容を記録しました。西洋社会の福祉事業に対する関心が高かったことがわかります。

洋学は幕末期にイギリス・フランス・ドイツから西洋の知識が入ってくるようになってきた学問です。それまで西洋の知識はオランダからもたらされるものでした(蘭学)。

蘭学者の間では、一翁のプランより二四〇年も前から**幼院・病院・貧院**の知識が広く知られていました。

貧院・幼院・病院の知識をもたらしした本

今から四百年前、江戸幕府の将軍が秀忠(第二代)から家光(第三代)に代わるころ、中国でイタリア人宣教師とキリスト教信者の中国人により、世界各国の社会制度・歴史を紹介する漢文の書籍「職方外紀(しよくほうがいき)」が刊行されました。この書籍はすぐに日本にも伝わりましたが、キリスト教宣教師の著作であり、まもなく幕府により禁書とされました。

ただ、西洋の知識を求めている蘭学者たちは、隠れて写本やその内容を引用した書籍を作り、禁書の「職方外紀」を海外事情を知るテキストとして二百年間使っていました。現在も全国各地の図書館に多くの写本が残されています。**幼院・病院・貧院**の知識は「職方外紀」により日本に伝わりました。現代も使われる病院という言葉は、蘭学・洋学者に使われていて、それがそのまま日本語として定着したものです。*1

では、養育院のルーツ**幼院・病院・貧院**の知識は、「職方外紀」ではどのように書かれていたでしょうか。

「職方外紀」の現代語訳が「大航海時代の地球見聞録 通解『職方外紀』」*2です。

この本から、貧院・幼院・病院の記述部分を引用してみます。

紫色の部分が引用文です。(前掲書 p—

四〇一—四二)

ヨーロッパの国人(くにびと)は天主の正教に奉(つか)え、二つのことを守る。一つは「天主を万物の上に敬愛する」こと、もう一つは「人を己のように愛する」ことである。(略)「人を己のように愛する」とは、一、その靈魂を愛し、善を行い悪を去り、天が生んだ福を享受することであり、二、身体を愛することである。自分が人を慈しまなければ、天主も自分を慈しまない。だからヨーロッパの人はよろこんで施しをする。千年来、貧しさで子女を売る者はおらず、飢餓で路に死ぬ者はいない。

貧院 身寄りのない者を養う。その中にいる者にも仕事があり、障がいがある人や病人も見すてない。盲目の者は手足を動かし、手足が麻痺したものは耳目をはたらかせ、それぞれ担当があり、その仕事に才をつくさせ、天地の廃物としない。

幼院 小児を養育する。貧者が子を産んで養

う力がなくても、これを殺すのは罪である。だから、とくにこの院を設けて、人に養育させ、子どもの命を全うさせる。その一族が貴くても家が貧しい者は、子を孤児院(幼院)に送るのを恥じるので、両方を立てる法がある。院の壁に穴があり、回転盤を設け、内と外が隔たり、互いに見えない。子どもを送る者は人に見られることなく、子を盤に置く。壁をたたけば、院の中の人々が盤を回転させて、子どもがはいる。洗礼を受けたかを子の胸に明記し、時が過ぎて、父母がまた養育するなら、入れた年月によって、その子を与えるのである。

病院 大きな街では数十ヶ所になる。中下の院には中下の人があり、大人(たいじん)の院には貴人がいる。貴人のうち、旅客や使者が病になれば、この院にはいる。病院は通常の家よりずっと美しく、必要な薬は係の者が管理し、名医が準備しており、毎日病人を診察する。また衣服や寝具があり、看護の人

もいる。病が癒えて去るとき、貧者には旅費を給する。これは国王や名家が設立したものであり、街じゅうの人が力をあわせてつくった。月ごとに有力な貴人がその事を総領し、薬物や飲食などは実際に試して比べる。

「職方外紀」の職方とは、古代中国の官職で、地方の異民族の状況を知り、官を送って治めさせる役職です。職方外紀とは「職方も知らない遠方世界について記した本」という意味です。



職方外紀
アジア大陸を示す図
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Zhi_fang_wai_ji_1.PNG

*1 荒川清秀、加藤周一氏の「明治初期の翻訳」について、文明21 No.3 p25-30

*2 ジュリオ・アレーニほか著／齊藤正高訳「大航海時代の地球見聞録 通解『職方外紀』」(原書房2017)

巣鴨分院の職業訓練と 藪入り会

櫻園通信 71 令和3年3月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先: 老年学情報センター

監修: 稲松孝思顧問医

作: 栄畑南美 (えばた なみ) 老年学情報センター



巣鴨分院 年長男子寮

養育院巣鴨分院は、1909（明治42）年に養育院から独立した孤児教育施設です。養育院本院では、入所人数の増加と、養育院にいる大人から子どもたちへの悪影響が懸念されていたため、巣鴨に子どもたちだけの施設が作られました。養育院の院長であった渋沢栄一も、巣鴨分院にほぼ毎月通っては孤児たちと交流していました。巣鴨分院は、1942（昭和17）年に現在の練馬区に移転し、名称も東京都石神井学園に変更され、児童養護施設として今に至っています。

巣鴨分院では、当時の小学校程度の教育を施していましたが、年長の男子・女子には社会へ出るための準備として職業訓練も行っていました。年長男子寮の中には印刷場があり、1925（大正14）年から職業訓練として印刷作業の実習を行っていました。

印刷作業の様子



ミシン裁縫を学ぶ様子

また、年長女子寮には炊事場があり、自炊の練習をして、家事ができるようにしていました。さらに、裁縫室とミシン裁縫室も設けられ、裁縫を習得できるようにしていました。

職業訓練を経て、巣鴨分院からはたくさん子どもたちが巣立っていきました。奉公先から奉公人が実家に帰ることのできる春と秋の藪入りには、巣鴨分院出身者も巣鴨分院に帰ってきて、院長の渋沢も出席し藪入り会が盛大に催されていたようです。

1930（昭和5）年9月の「東京市養育院月報」に、同年の藪入り会について記述した文章が残っていました。旧字を修正して裏面に引用します。

院外委託児童並出身者秋季数入り会 院長登庁
日なる九月十三日を選び、当分院においては院外
委託児童並出身者の秋季数入り会を挙行せり、会
場に当てたる講堂及び食堂は、職員一同の手によ
り前日までに美しく装飾せられたり、当日は夜来
の豪雨全く晴れ渡り、絶好の数入り日和となり、
早朝より喜色を満面に湛えつつ三々五々打ち連れ
来り、開会定刻の午前十時にはすでに数十名に達
したり（中略）

院長登壇、温容に微笑みを湛えられつつ、諄々
処世の要諦につき訓辞を与えられ、終わって校庭
にて記念撮影をなし、食堂においては保母の手に
なる特別献立の昼餐を饗し、午後再び余興を開き
（中略）午後四時三十分盛会裏に散会したり。当
日の来会者は男五十四人、女三十四人、計八十八
人なりき。

（東京市養育院月報、第 350 号 p.15）

この文からは、巣鴨分院の職員による出身者たちを迎えるための心尽くしの準備や、出身者たちの嬉し
そうな様子がよく伝わってきますね。渋谷も笑顔で訓辞したようです。それにしても、88 人も集まったと
は盛大な会ですね。



さて、この時撮影された巣鴨分院出身
者と院長の渋谷栄一の記念写真が、「創
立 60 周年記念写真帖」に残っていまし
た。左が 1930（昭和 5）年 9 月の数入
り会の写真です。前列真ん中に座ってい
るのが渋谷です。

「写真帖」にもこの写真の説明として
数入り会について記述があります。以下
に引用します。

出身者数入り会と渋谷院長 （中略）渋谷院長も
また出身者一同と親しく膝を交えて或いは訓話し、
あるいは共に余興をご覧になるのを大変喜びとして
おられた。（中略）写真はそうした記念撮影の一つ
である。

昭和五年九月、当時院長は九十一歳で尚矍鑠（か
くしゃく）たるものがあつた。しかるに翌六年忽然
として薨去（こうきょ）遊ばされようとは当時誰か
よく予知し得たであろう。

（創立 60 周年記念写真帖）



上の写真の渋谷は、なんと 91 歳でした。亡くなる前年にも、巣鴨分院の数入り会で
出身者との交流を楽しんでいた渋谷栄一。まさに、児童福祉は渋谷が生涯を通じて携わ
った福祉事業分野だったと言えるのではないのでしょうか。

【参考文献】

東京市養育院編（1930）『東京市養育院月報』第 350 号、東京市養育院。
———（1932）『創立 60 周年記念写真帖』———。

